

Title	松村高夫教授略歴・著作目録
Sub Title	Biographical sketch and writings of Professor Takao Matsumura
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2007
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.4 (2007. 1) ,p.883(277)- 895(289)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20070101-0277

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

松村 高夫教授 略歴・著作目録

* 2007年3月31日をもって慶應義塾大学
経済学部を定年退職するのにもない、
本学会を退会する会員の略歴・著作目録
を次頁以下に掲載します。

本誌編集委員会

松村 高夫教授 略歴・著作目録

2007年3月1日現在

生年月日

1942年1月7日

履歴

1954年4月 慶應義塾普通部入学
1960年4月 慶應義塾大学経済学部入学
1964年3月 同大学同学部卒業
1964年4月 慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程入学
1966年3月 同大学院同研究科修士課程修了 修士号（経済学）取得
1966年4月 慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程入学
慶應義塾大学経済学部助手
1969年3月 慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
1972年4月 慶應義塾大学経済学部助教授
1972年10月～76年9月 英国ウォーリック大学社会史研究所に留学
1976年12月 ウォーリック大学より Ph.D. (in Social History) 取得
1982年4月 慶應義塾大学経済学部教授
1987年4月～88年3月 英国ウォーリック大学社会史研究所に留学
1998年4月～99年3月 英国オクスフォード大学ナフィールド・コレッジに留学
2003年10月～03年12月 英国ケムブリッジ大学ダウニング・コレッジに出張
2003年1月～03年3月 英国ケムブリッジ大学キングス・コレッジに出張

現在

Labour History Review, Society for the Study of Labour History (1995～, International Board)

Cultural and Social History, Social History Society (2004～, Editorial Advisory Board)

Royal Historical Society (2007～, Corresponding Fellow)

研究刊行物リスト

著書

- 『日本帝国主義下の満州—「満州国」成立前後の経済研究』（満州史研究会編，浅田喬二，原朗，小林英夫と共著）御茶ノ水書房，1972年，第3章「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」，213～314頁。
- The Labour Aristocracy Revisited—The Victorian Flint Glass Makers, 1850–80*, Manchester University Press, 1983. (Book Reviews by T.C.Barker, *T.L.S.*, 1984・4・5; Robert Gray, *Economic History Review*, sec. ser., 37-3, 1984; David Englander, *Victorian Studies*, Summer 1985 etc.)
- 『英国をみる—歴史と社会』（草光俊雄，近藤和彦，齊藤修と共編）リプロポート，1991年，『「貧民狂人」とモラル・トリートメント—一八四五年『狂気法』のパラドックス』，175～198頁。
- 『七三一部隊作成資料』（十五年戦争極秘資料集，29）（田中明と共編）不二出版，1991年，「解説」，1～23頁。
- 『証言 人体実験—七三一部隊とその周辺』（江田憲治，兒嶋俊郎と共編訳）同文館，1991年，「解説」，253～290頁。
- 『＜論争＞731部隊』（編著）晩聲社，1994年，11～168頁，1997年増補版，304～319頁増補。
- 『もう1つの選択肢—社会民主主義の苦渋の歴史』（「これからの世界史」10）（西川正雄，石原俊時と共著）平凡社，1995年，第3部「イギリスの社会民主主義」，191～284頁。
- 『戦争と疫病—七三一部隊のもたらしたもの』（解学詩，郭洪茂，李力，江田いづみ，江田憲治と共著）本の友社，1997年，第1章「関東軍防疫給水部—七三一部隊と細菌作戦」，9～39頁；第5章「湖南常德細菌作戦—一九四一年」，225～282頁；終章「細菌戦研究の問題性」，395～419頁。
- （中国語版）『戦争与悪疫—七三一部隊罪行考』（解学詩等と共著）北京・人民出版社，1998年，第1章「関東軍防疫給水部」，1～28頁；第5章「湖南常德細菌戦—一九四一年」，194～245頁；末章「関干細菌戦調査研究工作的回顧」，355～377頁。
- 『「事実」をつかむ—歴史・報道・裁判の場から考える』（新井章，本多勝一，渡辺春己と共著）こうち書房，1997年，第2章「歴史における事実とは何か」，36～74頁；座談会「「事実」をつかむということ—歴史・報道・裁判における事実」，139～263頁；「座談会を終えて」，271～278頁。
- 『歴史の事実をどう認定しどう教えるか』（笠原十九司，吉見義明，高嶋伸欣，渡辺春己と共編著）教育史料出版会，1997年，「731部隊」，14～61頁。
- 『七三一部隊がやってきた村—平房の社会史』（関成和著，江田いづみ，江田憲治と共編訳）こうち書房，2000年，「序」，6～23頁。
- Japan, 1868~1945: From Isolation to Occupation* (Co-author with John Benson), Longman, 2001.
- 『裁かれる細菌戦—歴史学者とジャーナリストによる鑑定書』（資料集シリーズ no.6）（近藤昭二と共著），ABC企画委員会ほか発行，2001年，「日・米・中・ソの資料による七三一部隊と細菌戦の解明」，11～

124 頁。

『満鉄労働史の研究』（解学詩，江田憲治と主編）日本経済評論社，2002 年，「序章」，2～24 頁；第 7 章「撫順炭鉱」，286～329 頁。

（中国語版）『満鉄与中国劳工』（解学詩と共編著）北京・文献社会科学出版社，2003 年，「序章」1～24 頁；第 7 章「撫順煤礦工人実態」316～362 頁。

Urban Reconstruction in Britain and Japan, 1945-1955: Dreams, Plans and Realities (Co-author with Nick Tiratsoo, Junichi Hasegawa, Tony Mason) University of Luton Press, 2002.

『イギリスの鉄道争議と裁判—タフ・ヴェイル判決の労働史』ミネルヴァ書房，2005 年。

『戦災復興の日英比較』（ティラッソー，メイソン，長谷川淳一と共著）知泉書館，2006 年。

『関東軍化学部・毒ガス戦教育演習関係資料』（十五年戦争極秘資料集 補巻 27）（松野誠也と共編）不二出版，2006 年，「解説」，5～23 頁（共同執筆）。

『大量虐殺の社会史—戦慄の二十世紀』（矢野久と共編著）ミネルヴァ書房，2007 年，「序論」，「トルコにおけるアルメニア人虐殺—一九一五—一六年」，「韓国・老斤里虐殺事件—1950 年」執筆。

『裁判と歴史学』（矢野久と共編著）現代書館，2007 年。

『日本帝国主義下の植民地労働史』不二出版，2007 年。

『満鉄の調査と研究—その「神話」と実像』（柳沢遊，江田憲治と共編著）青木書店，2007 年，「満鉄調査部弾圧事件」執筆。

『イギリスの選挙法改正暴動—一八三一年』法政大学出版局，2007 年。

『東アジア—日本が問われていること』（連続講義）（高草木光一と共編）岩波書店，2007 年。

『関東軍五一六化学戦部隊と毒ガス遺棄問題』（仮題）（歩平と共著）かもがわ出版，2007 年。

論文

「日本帝国主義下における植民地労働者—在日朝鮮人・中国人労働者を中心に—」，慶應義塾経済学会『経済学年報』10，1966 年（後に，朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行強制労働の記録—北海道，千島，樺太篇』1974 年，現代史出版会，610～619 頁に一部収録）。

「日本帝国主義下における『満州』への朝鮮人移動について」，『三田学会雑誌』63-6，1970 年 7 月。

「イギリス産業革命期の生活水準」，『三田学会雑誌』63-12，1970 年 12 月。

「日本帝国主義下における『満州』への中国人移動について」，『三田学会雑誌』64-9，1971 年 9 月。

「イギリス旧救貧法—『定住法』—にかんするノート」，『三田学会雑誌』64-10，1971 年 10 月。

「オーストリア抵抗資料研究所」（資料），『季刊 社会思想』3-2，1973 年 8 月。

‘The Glass Washer’s Lockout’, *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, no.28, Spring 1974.

- The Flint Glass Makers in the Classic Age of the Labour Aristocracy, 1850–80, Ph.D. Thesis, University of Warwick, 1976.
- 「労働貴族の古典的時代におけるフリントガラス製造工」(1) (2), 『三田学会雑誌』70–3, 70–5, 1977年6月, 同年10月。
- 「十九世紀第三・四半期のイギリス労働史理解をめぐって」(上) (下) 『日本労働協会雑誌』224, 225, 1977年11月, 同年12月。
- 「イギリスにおける社会史研究」, 角山栄, 速水融編『経済史学の発達』(「講座西洋経済史」V) 同文館, 1979年, 151–171頁。
- ‘Artisan Elite in Victorian Society (Review Essay)’, *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, no.30, Spring 1979.
- 「イギリス・ウォーリック大学の Modern Records Centre 所蔵資料」, 『三田学会雑誌』72–4, 1979年8月。
- 「イギリス労働史の文献」, 『三色旗』385, 1980年4月。
- 「一八三一年のノッティンガム暴動」(上) (下), 『三田学会雑誌』75–6, 76–2, 1982年12月, 83年6月。
- 「ヴィクトリア中期の生産協同組合」, 『ロバート・オウエン協会年報』VII, 1983年。
- 「イギリス労働史の諸問題」, 社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣, 1984年, 245–254頁。
- 「マルクスと労働貴族—ロイドン・ハリスンの所論との関連で—」(上) (下), 『三田学会雑誌』76–5, 76–6, 1983年12月, 84年2月。
- 「イギリスにおける社会史研究とマルクス主義史学」, 『歴史学研究』532, 1984年9月。
- 「イギリス労働史研究の社会史的傾向」, 『労働史研究』創刊号, 1984年4月。
- 「19世紀イングランドの民衆運動」, 『歴史学研究』534, 1984年10月増刊号。
- 「『731部隊』の実験報告書」, 『歴史学研究』538, 1985年2月。
- ‘Emigration and Co-operative Production by the Victorian Flint Glass Makers, 1850–80’, *Keio Economic Studies*, 22–2, 1985.
- 「マルクス・労働貴族・生産協同組合」, 都築忠七編『イギリス社会主義思想史』三省堂, 1986年, 63–89頁。
- 「イギリスの文化的マルクス主義」, 江口英一, 相沢与一編『現代の生活と「社会化」』II 労働旬報社, 1986年, 253–270頁。
- 「労働組合の形成と発展」, 米川伸一編『概説イギリス経済史』有斐閣, 1986年, 255–271頁。
- 「ヴィクトリア期イングランドの労働組合による移民」, 一橋大学『経済研究』37–1, 1986年1月。
- 「イギリス暴動史研究にかんするノート」, 『三田学会雑誌』78–6, 1986年2月。
- 「タフ・ヴェイル判決とイギリス鉄道労働運動」(1) ~ (VII), 『三田学会雑誌』76–6~87–4, 1986年12月~95年1月。
- 「イギリスのオーラル・ヒストリー (報告) および「討論」」, 『歴史学研究』568, 1987年6月。
- 「イギリスにおける労働貴族論争」, 『日本労働協会雑誌』340, 1987年11月。

- 「労働者階級意識の形成」, 二宮宏之編『社会的結合』(「世界史への問い」4) 岩波書店, 1989年, 229-254頁。
- 「セントラル・レイバー・コレッジ, 1909年-1929年」(上)(下), 『三田学会雑誌』81-1, 82-3, 1989年4月, 同年10月。
- 「イギリス産業革命期における生活水準論争再訪」(上)(下), 『三田学会雑誌』82-2, 83-1, 1989年7月, 90年4月。
- 「第二次世界大戦期の朝鮮人強制連行・強制労働」(資料), 『三田学会雑誌』83-3, 1990年10月。
- 「最初の社会調査家, ヘンリー・メイヒューと江口英一先生」, 江口英一編『日本社会調査の水脈』法律文化社, 1990年, 583-592頁。
- ドロシー・トムスン『チャーティスト』(書評論文), 『社会思想の窓』77, 1990年11月。
- 「解説」, 森村誠一『続・悪魔の飽食』(改訂新版)角川書店, 1991年, 264-284頁。
- 「社会史的社会政策とは何か」, 『社会政策叢書』編集委員会編『社会政策研究の方法と領域』(社会政策叢書, 15) 啓文堂, 1991年, 53-76頁。
- 「狂気と十九世紀イギリスの社会」, 近藤和彦, 福井憲彦編『歴史の重さ-ヨーロッパの政治文化を考える』日本エディタースクール出版部, 1991年, 7-36頁; 「ディスカッション『比較史から見えるもの』」, 113-277頁。
- 「イギリス炭鉱ストにみる警備・弾圧態勢(1984-85年)」, 『大原社会問題研究所雑誌』390, 1991年5月。
- 「歴史における実証とは何か-七三一部隊を考える」, 『労働史研究』5, 1991年10月。
- 「ヒル・レポート-731部隊の人体実験に関するアメリカ側調査報告(1947年)」, (金平茂紀と共著), 『三田学会雑誌』84-2, 1991年7月。
- 「オズボーン判決(1909年)」(1)(2), 『三田学会雑誌』86-2, 90-1, 1993年7月, 97年4月。
- 「ジョン・パトンの訪日日記(1947年)」(上)(下), 『三田学会雑誌』86-2, 86-4, 1993年7月, 94年1月。
- 「社会史の言語論的アプローチをめぐって-ステッドマン・ジョーンズ『チャーティズム再考』を再考する」, 『三田学会雑誌』86-3, 1993年10月。
- 「労働運動・社会主義・協同組合」, 白井厚, 小松隆二監修『現代の経済と消費生活』コープ出版, 1994年, 23-46頁。
- 「七三一部隊とは何か?」, 戦争犠牲者を心に刻む会編『七三一部隊』(アジアの声, 8) 東方出版, 1994年, 15-30頁; 「国際常識の731部隊を載せない日本の検定教科書」, 111-121頁。
- ‘Labour Relations in Japan between the Wars’, Jim Hagan & Andrew Wells eds., *Industrial Relations in Australia and Japan*, Allen & Unwin, 1994, Chapter 4, 37-46.
- 「七三一部隊と第三次教科書訴訟」, 『歴史評論』528, 1994年4月。
- 「日本軍の毒ガス研究と生産」, 歴史教育協議会編『幻ではなかった本土決戦』高文研, 1995年, 223-245頁。
- 「職人から労働者へ-イギリスの場合」, 歴史学研究会編『資本主義は人をどう変えてきたか』(「講座世界史」4), 東京大学出版会, 1995年, 11-34頁。

- 「七三一部隊と人体実験」, ICJ 国際セミナー東京委員会編『裁かれるニッポン—戦時奴隷制—日本軍「慰安婦」・強制労働をめぐる』日本評論社, 1996 年, 211~223 頁。
- 「近代とは何か—個人主義, 合理主義, 資本主義再考」, 西村割通, 竹中恵美子, 中西洋編『個人と共同体の社会科学—近代における社会と人間』ミネルヴァ書房, 1996 年, 19~44 頁。
- ‘Employers and Workers in Japan between the Wars’, Peter Mathias and John Davies eds., *Enterprise and Labour: from the Eighteenth Century to the Present, The Nature of Industrialization*, vol. 3, Blackwell Publishers, 1996, pp.138~149.
- 「広島・長崎の原子爆弾に関する初期調査」, 『三田学会雑誌』89-1, 1996 年 4 月。
- 「L. プレンターノ『ギルドの歴史・発展と労働組合の起源』」, 『日本労働研究雑誌』432, 1996 年 4 月 (のちに, 高梨晶, 花見忠監修『事典・労働の世界』日本労働研究機構, 2000 年, 619-623 頁に収録)。
- 「七三一部隊と奉天俘虜収容所」(資料紹介), 『季刊 戦争責任研究』13, 1996 年秋季。
- 「戦争と社会—ABC 兵器」, 『三色旗』589, 1997 年 4 月。
- 「中国湖南省常德細菌作戦」, 中国浙江省社会科学院『浙江学刊』, 1997 年 4 月。
- 「七三一部隊と細菌戦—日本現代史の汚点」, 『三田学会雑誌』91-2, 1998 年 7 月 (後に, 学術文献刊行会『日本史学年次別論文集, 近現代 2, 1998 年』に収録)。
- 「15 年戦争期における撫順炭鉱の労働史」, (上), 『三田学会雑誌』, 93-2, 2000 年 7 月。
- 「見果てぬ夢—労働組合の日英関係 (1930-1939 年)」, 都築忠七, ゴードン・ダニエルズ, 草光俊雄編『日英交流史, 1600-2000, 5, 社会・文化』東京大学出版会, 2001 年, 182~203 頁。
- (英語版) ‘Anglo- Japanese Trade Union Relations between the Wars’, Gordon Daniels and Chushichi Tsuzuki eds., *The History of Anglo-Japanese Relations, 1600-2000*, vol.5, *Social and Cultural Perspectives*, Palgrave, 2002, pp.265~280.
- 「社会史分析における政府の役割」, 慶應義塾大学経済学部現代経済研究会編『経済学による政府の役割分析』慶應義塾大学出版会, 2001 年, 83~96 頁。
- 「関東軍『特移扱』文書の解説」(近藤昭二と共同執筆), 中国黒龍江省檔案館, 中国黒龍江省人民対外友好協会, 日本 ABC 企画委員会編『「七三一部隊」罪行鉄証—関東憲兵隊「特移扱」文書』中国・黒龍江人民出版社, 2001 年, 301~328 頁 (中国語版も刊行)。
- 「ロンドン空襲の経験と記憶」, 『歴史評論』616, 2001 年 8 月。
- 「日本における七三一部隊の解明」, 田中明編『近代日中関係史再考』日本経済評論社, 2002 年, 139~157 頁。
- 「マス・キリングの社会史—問題の所在」, 『三田学会雑誌』94-4, 2002 年 1 月。
- 「アルメニア人虐殺 1915-16 年」, 『三田学会雑誌』94-4, 2002 年 1 月。
- 「フレーム・アップとしての満鉄調査部弾圧事件 (1942-43 年)」, 『三田学会雑誌』95-1, 2002 年 4 月。
- 「経済学という幻想」, 慶應義塾大学経済学部編『経済学の危機と再生』(「市民的共生の経済学」4) 弘文堂, 2003 年, 175~196 頁。

- 「新京・農安ペスト流行の解説」(江田いづみと共同執筆), 中国・吉林省檔案館, 日本・日中近現代史研究会, 日本 ABC 企画委員会編『「七三一部隊」 罪行鉄証—特移扱・防疫文書編集』中国・吉林人民出版社, 2003 年, 455~468 頁 (中国語版も刊行)。
- 「新京・農安ペスト流行」(1940 年)と 731 部隊」(上)(下), 『三田学会雑誌』95-4, 96-3, 2003 年 1 月, 同年 10 月。
- 「社会史の認識論的一系譜—ヴィーコからミシュレへ, さらにフェーブルへ—, 『三田学会雑誌』96-3, 2003 年 10 月。
- 「『階級』 概念は時代遅れか?—イギリス社会史におけるポスト・モダニズムとその批判的検討—, 慶應義塾大学法学研究会『法学研究』77-1, 2004 年 1 月。
- 「ハーマンとヘルダーの歴史認識」(批判・応答), 『三田学会雑誌』98-1, 2005 年 4 月。
- 「朝鮮戦争下, 老斤里虐殺事件の真実」, 『世界』740, 2005 年 6 月。
- 「歴史認識論と『歴史認識問題』」, 『三田学会雑誌』98-4, 2006 年 1 月。
- 「満州における共産党と『満鉄マルクス主義』」, 加藤哲郎, 伊藤晃, 井上覚編『社会運動の昭和史—語られざる深層』白順社, 2006 年, 213~254 頁。
- 「咸錫憲と池明観の宗教哲学にみる社会史的認識論」, 『三田学会雑誌』98-4, 2006 年 1 月。

翻訳

- T.S. アシュトン『イギリス産業革命と労働者の状態』(社会科学ゼミナール 55) (杉山忠平と共訳) 未来社, 1972 年, 「訳者解説」, 112~133 頁。
- ピーター・バーク「歴史的叙述—再生か新生か」(稲葉公一と共訳), 『英国をみる—歴史と社会』リプロポー ト, 1991 年所収。
- トニー・メイソン『英国スポーツの文化』(山内文明と共訳) 同文館, 1991 年, 「訳者解説」, 189~204 頁。
- アイヴィッド・ランデス「産業革命論再訪」(高井哲彦と共訳), 『社会経済史学』57-1, 1991 年 5 月所収。
- アイヴィッド・ダビディーン『大英帝国の階級・人種・性—W. ホガースにみる黒人の図像学』(市橋秀夫と共訳) 同文館, 1992 年。
- K.D. ブラウン「自由主義イングランドの奇妙な死, 1910 年~1914 年—一つの再解釈」(菅一城と共訳), 『社会経済史学』61-2, 1995 年 4 月。
- ロイドン・ハリソン『産業衰退の歴史的考察—イギリスの経験』(高神信一と共訳) こうち書房, 1998 年, 「訳者あとがき」, 181~199 頁。
- チャールズ・ファインシュティーン, アン・デイグビー編『経済史・社会史の新方向』(高井哲彦, 長谷川淳一, 上田美枝子と共訳) 北海道大学出版会, 2007 年, 「訳者あとがき」執筆。

書評

- 加藤佑治『日本帝国主義下の労働政策』、『歴史評論』245, 1970年12月。
- 満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』、『三田学会雑誌』70-3, 1977年6月。
- 小山路男『西洋社会事業史論』、『日本労働協会雑誌』240, 1979年3月。
- G. クロスイック『ヴィクトリア社会のアルティザン・エリート』、『三田学会雑誌』72-4, 1979年8月。
- Royden Harrison et. al., *The Warwick Guide to Labour Periodicals, 1780-1970. A Check List*, 『三田学会雑誌』72-6, 1979年10月。
- バンクス夫妻著 川村貞枝訳『ヴィクトリア時代の女性たち—フェミニズムと家族計画』、『創文』197, 1980年5月。
- 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』、『日本読書新聞』2063, 1980年6月30日。
- E.J. ホブズボーム著 柳父圀近ほか訳『資本の時代 1848-1875』(1), 『経済セミナー』322, 1981年11月。
- 角山栄, 川北稔編『路地裏の大英帝国』(新刊紹介), 『史学雑誌』92-1, 1983年1月。
- 安川悦子『イギリス労働運動と社会主義』、『社会政策年報』27, 1983年5月。
- 小山路男編著『福祉国家の生成と変容』、『社会福祉研究』34, 1984年4月。
- 高橋克嘉『イギリス労働組合主義の研究』、『日本読書新聞』2274, 1984年9月17日。
- ジョージ・リューデ著 古賀秀男ほか訳『イデオロギーと民衆抗議—近代民衆運動の歩み—』、『社会経済史学』53-1, 1987年4月。
- 二村一夫『足尾暴動の史的分析』、『三田学会雑誌』81-3, 1988年10月。
- A. ブリックス『ヴィクトリア朝の人びと』(新刊紹介), 『史学雑誌』98-2, 1989年2月。
- 原剛『十九世紀末英国における労働者階級的生活状態』、『社会経済史学』54-6, 1989年3月。
- 中山章『イギリス労働貴族—十九世紀におけるその階層形成』、『大原社会問題研究所雑誌』374, 1990年1月。
- 浅田喬二『日本植民地研究史論』、『三田学会雑誌』85-1, 1992年4月。
- 竹内幸雄『イギリス自由貿易帝国主義』、『三田学会雑誌』86-3, 1993年10月。
- ロイ・ポーター著 目羅公和訳『狂気の社会史』、『三田学会雑誌』86-3, 1993年10月。
- 米川伸一『現代イギリス経済形成史』、『社会経済史学』59-4, 1993年10・11月。
- 近藤和彦『民のモラル』、『週刊読書人』2018, 1994年1月21日。
- 冬季衛生研究班編『極秘 駐蒙軍冬季衛生研究成績』、『週刊金曜日』101, 1995年12月1日。
- 小沢弘明ほか『労働者文化と労働運動』、『週刊読書人』2123, 1996年2月23日。
- 西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』、『日本労働研究雑誌』453, 1998年2・3月。
- 小笠原浩一『「新自由主義」労使関係の原像』、『社会経済史学』64-3, 1998年9月。
- シェリダン・H・ハリス著 近藤昭二訳『死の工場』、『図書新聞』2464, 1999年12月4日。
- 木畑洋一編著『大英帝国と帝国意識—支配の深層を探る』、『社会経済史学』66-2, 2000年7月。

E.J. ホブズボーム著 浜林正夫ほか訳『ナショナリズムの歴史と現在』, 2390, 『週刊読書人』2001年6月8日。

笠原十九司『南京事件と日本人』, 『週刊金曜日』425, 2002年9月27日。

エリック・ホブズボーム著 原剛訳『歴史論』, 『社会経済史学』69-5, 2004年1月。

西成田豊『中国人強制連行』, 『歴史と経済』182, 2004年1月。

ロイドン・ハリソン著 大前眞訳『ウエップ夫妻の生涯と時代—1858–1905年：生誕から共同事業の形成まで—』, 『西洋史学』220, 2006年3月。

内海愛子, 石田米子, 加藤修弘編『ある日本兵の二つの戦場—近藤一の終わらない戦争—』, 『歴史学研究』813, 2006年4月。

安保則夫『イギリス労働者の貧困と救済—救貧法と工場法』, 『社会経済史学』72-3, 2006年9月。

久木尚志『ウェールズ労働史研究—ペンリン争議における階級・共同体・エスニシティ』, 『歴史学研究』824, 2007年2月。

エッセイその他

「韓国印象記—私が見て歩いた一ヶ月—」(ペンネーム・八高栄太郎)『統一評論』22, 1964年11月。

「イギリスの図書館」, 『西日本文化』92, 1973年6月。

「新聞資料求めて英国行脚」, 『日本経済新聞』1977年1月24日。

「ウエップの『労働組合運動史』」, 『大学報』1977年2月1日。

「私とガラス」, 『慶應通信』1977年8月1日。

「イギリスの『生涯教育』」, 『三色旗』358, 1978年1月。

「大塚金之助先生の思い出」, 『三田評論』778, 1978年2月。

「ことばのサロン—『通信』」, 『三色旗』377, 1978年10月。

「コンスタブルの恐れた人々」, 『コンスタブル』(世界の巨匠シリーズ) 美術出版社, 1979年所収。

「1979年秋のヒストリー・ワークショップに参加して」, 『労働運動史研究』63, 1980年10月。

「イギリスの図書館・日本の図書館」, 『三色旗』406, 1981年1月。

「優秀なライブラリアン(イギリス)」, 『塾』110, 1981年12月。

「Dr. フレッド・リードのこと」, 『KULIC』1982年12月。

「講義覚書—黙々とノートする学生とは?」, 『塾』117, 1983年2月。

「伊豆湯ヶ島で大塚先生逮捕50周年を想う」, 『大塚会会報』6, 1984年。

「社会史について最近思うこと」, 『三色旗』438, 1984年9月。

「イギリス炭労の闘い—ジョン・バロウス氏との対話—」, 『賃金と社会保障』913, 1985年5月上旬。

「提言—キャンパスに劇場を」, 『塾』137, 1986年6月。

「鼎談—音楽と教育と」, 『けいおう』創刊号, 1986年9月。

- 「731部隊跡に立って」、『歴史学研究』562, 1986年12月。
- 「イギリス—現代」(回顧と展望), 『史学雑誌』96-5, 1987年5月。
- 「滞英資料蒐集雑話」, 『大塚会会報』13, 1988年。
- 「マルクスの生産協同組合観」, 『賃金と社会保障』1018, 1989年9月下旬。
- 「七三一部隊の人体実験は国際常識」(家永教科書裁判第三次訴訟控訴審意見書) 1991年9月。
- 「座談会—社会史のすすめ」, 『三色旗』523, 1991年10月。
- 「National Inventory of Documentary Sources in the United Kingdom をめぐる雑感」, 『PINUS』32, 1991年。
- (辞典)「生活水準」, 大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』岩波書店, 1992年。
- 「七三一部隊と細菌作戦」(研究余滴), 『三田評論』938, 1992年7月。
- 「『証言 人体実験』(新著紹介)」, 『三色旗』532, 1992年7月。
- 「『大英帝国の階級・人種・性』によせて」, 『三色旗』536, 1992年11月。
- 「特集「社会史と文学」について—E.P. トムソンを追悼する」, 『三田学会雑誌』86-3, 1993年10月。
- 「近代合理主義と選別・排除の論理—ヴィーゴ, ニジンスキー, フーコー」, 『三色旗』559, 1994年10月。
- 「『<論争> 731部隊」(新著紹介)」, 『三色旗』559, 1995年10月。
- 「七三一部隊とエイズ」, 『教科書裁判ニュース』331, 1995年11月20日。
- (事典)「ラダイト運動」「社会改革」「社会事業」「改良」, 『歴史学事典』4巻「民衆と変革」弘文堂, 1996年。
- 「七三一部隊は過去のできごとか」, 『三色旗』577, 1996年4月。
- 「ウォーリック大学社会史研究所—一九七〇年代の群像」, 『飯田鼎著作集』1997年しおり。
- 「検証 no.2 常徳細菌作戦」, 『明らかにする会・通信』3, 1997年3月。
- 「常徳からスタンフォードへ」, 『ネアンデルタル』1997年創刊準備号, 1997年春。
- 「悪魔の飽食—七三一部隊の黒い爪痕」(ジョン・ウィリアム・パウエル, 下里正樹との鼎談), 『週刊金曜日』189, 1997年9月5日。
- (事典)「ホブズボーム」「トムソン」「コール」「ウエップ」, 『歴史学事典』5巻「歴史家とその作品」弘文堂, 1997年。
- (事典)「国際労働者協会」「労働組合」, 『マルクス・カテゴリー事典』大月書店, 1997年。
- (事典)「731部隊・細菌戦・毒ガス戦」, 『日本20世紀館』小学館, 1999年, 470-471頁。
- 「杉山忠平先生追悼—沼津に先生のお宅を訪ねた日」, 『大塚会会報』27, 2000年。
- 「細菌戦裁判を傍聴して考えたこと」, 『ロバート・オウエン協会年報』25, 2001年。
- 「『解放思想史の人々』を再読して—アレキサンダー・ヘルツェン・大塚金之助・アイザイア・バーリン」『大塚会会報』28, 2001年8月。
- 「戦争の世紀としての20世紀—731部隊と細菌戦」, 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会編『アジア太平洋戦争下の大学と軍隊』2001年8月。

「慶應義塾は文化財・芸術品を破壊する大学になった—萬来舎ノグチ・ルーム解体」、『大塚会会報』30, 2003年8月。

「抗議した敬蘭芝さん逝く」、『ABC企画NEWS』44, 2006年7月15日。

合唱組曲原詩・森村誠一『悪魔の飽食』『正義の基準』の英訳, 2006年。

「ピエール・ノラらの『歴史のための自由』は「自由のための歴史」を放棄したのか？」(コラム歴史の風)『史学雑誌』116-3, 2007年3月。